



掘立柱建物7



掘立柱建物1と柵

福満遺跡(第23次調査)遺構概略図(S=1:500)

- 竪穴住居
- 掘立柱建物



ひこね燦ばれす

城南小学校

井戸



溝2(左)・河道1(右)



竪穴住居1出土の土器



溝3出土の漆器



竪穴住居7・8周辺

【飛鳥時代（約1400年前）】^{ほったてぼしら} 竪穴住居とともに掘立柱建物・柵がみられるようになります。造りつけカマドを持つ約5m四方の方形の竪穴住居（竪穴住居11・12）、掘立柱建物（掘立柱建物1～6）が確認されています。ほかに約6.5m四方の方形の竪穴住居が確認されており（竪穴住居9・10）、当該期頃までに建てられたものと思われます。

【奈良時代（約1300年前）】東西に整然と並び2棟の総柱の掘立柱建物が出現します（掘立柱建物7・8）。これらは倉庫と考えられ、いずれも20畳前後の広さがあります。また約8m南には掘立柱建物がみつかりました（掘立柱建物9）。この時期には周辺の物資を集約する機能を担う機関があったと考えられます。

【平安時代（約1200年前）】掘立柱建物1棟（掘立柱建物10）、井戸、河道（河道2）などがみつかりました。井戸は井戸杵を持たない素掘りのもので、^{にさい}二彩陶器・^{りよくめう}緑釉陶器などが出土しています。これらの土器は日常雑器ではなく高級食器として知られます。また河道は幅14m以上・深さ約1.5mで、^{はくじ}白磁や^{かいゆう}灰釉陶器のほか、^{ほじき}土師器・^{すえき}須恵器といった土器類、下駄・曲物などの木製品、金属製の帯金具など、平安時代を中心とした複数期の様々な種類の遺物が含まれています。

【鎌倉時代（約800年前）】幅約3m・深さ約1mの溝がみつきり（溝4）、土器のほか^{しつき}漆器などの木製品や^{といし}砥石などの石製品が出土しています。

まとめ

今回の調査では縄文時代後期～鎌倉時代の複数期にわたる遺構・遺物が見つかり、古墳時代後期以降は大規模に展開する様子うかがえます。特に奈良時代以降については一般集落とは異なる様相を示し、役人や位の高い人の出入りするような施設、また物資の集約とともにそれらを管理するような施設が福満遺跡やその周辺にあったと考えられます。さらに、それ以前から人々が生活しており、当該地一帯は連綿と続く重要な場所であったことがうかがえます。遺跡の全貌そして周辺の歴史については、今後の調査・研究によって、ますます解明されていくものと思われます。



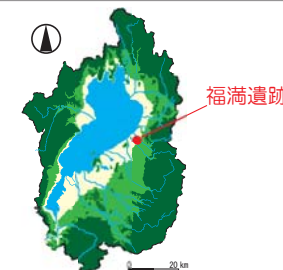
福満遺跡 (第23次) 発掘調査説明会資料

平成30(2018)年9月30日(日) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会



彦根市の依頼により、(仮称)彦根市新市民体育センター等建設工事にともなう発掘調査を行っています。

- ◇遺跡名 : 福満(ふくみつ)遺跡
- ◇所在地 : 彦根市小泉町地先
- ◇調査面積 : 11,550㎡
- ◇調査期間 : 平成29年8月～平成31年3月(予定)
- ◇調査主体 : 彦根市教育委員会
- ◇調査機関 : 公益財団法人滋賀県文化財保護協会



遺跡の位置

福満遺跡は、彦根市内を流れる犬上川右岸に所在し、低地の氾濫原から微高地の自然堤防上に位置します。市域では平安時代頃から「条里制」といわれる国家的な耕地整理の普及することが知られますが、同遺跡は河川に近接しており、度重なる犬上川の氾濫のため、この耕地整理の及ばない場所であったようです。



これまでの調査

福満遺跡が知られるようになったのは、大正7年(1918年)に水田面から約1m下で、弥生土器が見つかったのがきっかけです。その後、城南小学校・城南保育園の建設や周辺の宅地開発にともない、昭和56年(1981年)以降の22次にわたる発掘調査によって、土器や石製品などとともに住居や溝などの集落遺構が見つかり、福満遺跡は様々な時代の遺構が重なる複合遺跡であることがわかってきました。

調査の成果

【縄文時代】後期(約3500年前)の遺物を含む、幅約3～5.5m・深さ約70cmの河道がみつかりました(河道1)。今回の調査で住居跡などの遺構はみつかりませんが、近隣に生活の場がある可能性があります。下層には、犬上川が川筋を変えながら土砂を堆積させていった様子が確認されました。

【弥生時代】次に生活の営みが確認されるのは、弥生時代後期(約2000年前)です。竪穴住居が1棟みつかりました(竪穴住居1)。約6.5m四方の方形の住居で、中央付近に炉を持ちます。

【古墳時代】続く古墳時代前期(約1700年前)には、重複する約4～5.5m四方の方形の竪穴住居がみつかり、古墳時代中期(約1600年前)には約6.5m四方の方形の竪穴住居が確認され(竪穴住居4・5)、竪穴住居5からは、朝鮮半島由来の韓式系土器がみつかりました。

古墳時代後期(約1500年前)には、住居跡などの遺構が大規模に展開されるようになります。調査区を幅約1～1.5m・深さ約80cmの溝が横断し(溝1)、ほぼ直行する向きに幅7.5～10m・深さ約40cmの溝がみつかりました(溝2)。これらの溝は遺物の出土状況から続く飛鳥時代までは機能していたと考えられます。さらに、3.5～5.5m四方の方形で、造りつけカマドを持つ竪穴住居も確認されています(竪穴住居6～8)。